

月刊 中東レポート

第94号

発行 ウニタ書舎
 東京都千代田区神田神保町1-52
 TEL (03) 3291-5533
 編集 J. R. A.
 郵便振替 東京1-48443
 三菱銀行神保町支店 当座9012656
 会員制 年会費24,000円

- 華々しい外交展開と人民の現実……………
 資料……………6
 インティファーダの声よりも強力なものはない
 一〇組織声明(抄)
 アラファトは辞任せよ——フート(抄)
 パレスチナ中央評議会をめぐって(抄)
 パレスチナシオニスト合意の苦い果実(抄)
 パレスチナ難民は郷土を見つけられるか(抄)
 中東和平の道には多くの地雷が隠されている(抄)
 シリアは和平の鍵を握っている
 被追放者たちの現状
 重要日誌(一九九三年九月一日～一〇月一〇日)……15

情を軸にして、展開したい。

一 調印式とシオニストのもぐろみ

「クリントン政権の政策が和平過程を妨げている」と報告したのは、イスラエルのシンクタンクのジャフィ戦略研究所であった。他方、「内政のクリントン」を看板に登場したクリントン政権は、なんらめぼしい成果を挙げることもないままであった。そういう状況だったからこそ、クリントンはパレスチナとイスラエルの暫定自治合意の調印式を華々しく演出し、あたかも自らの大得点でもあるかのように宣伝しようとした。

だが、誰もが知っているように、これはクリントン政権の成果ではなかった。そもそも、中東和平のレールを敷いたのはブッシュ政権であつたし、今回の合意の陰の立役者は秘密交渉をえたノルウェイであった。そうしたことを見ても、クリントンは成果を演出しなければならなかつた。

一方、ラビンはそうしたクリントンの演出に協力するよりも、突然のモロッコ訪問で自らの大得点を飾ろうとした。

他方、一九年ぶりに米国の方に立ったアラファト議長は、この機会を活用した。八二年以来の自らの戦略的勝利を誇示するかのように。

一〇月六日、アラファトとラビンは、カイロ

で再度の会談をし、合意内容を実際的につめていく方法を確認した。そうしたことをもつて、

一〇月一〇日からのパレスチナ中央評議会で、

合意への支持を、確実にしようというのである。

国際報道機関は、ホワイトハウスでの調印式

をもって、あたかも中東和平が達成されたかのよう伝えている。が、実態はなんら変わって

はいない。華々しい外交展開の陰で、人民はそ

れなりの期待と同時に不安を持ち、そして反占領の闘いを推し進めている。

今号では、華々しい外交展開の中に示される

各々のもろみと、その陰で苦しむ人民の現

もはや中東和平が成立したかのように言いふくめ、アラブ諸国やイスラム諸国には、イスラエルとの国交の正常化、アラブ・ボイコットの解除への圧力をかけ、他方、シリア、レバノンへはパレスチナに見習えと圧力をかけている。

一〇月一日には、パレスチナ支援国會議を主催し、被占領地への国際的な経済支援を各国に強要した。いうまでもなく、それは、米経済、ユダヤ資本にとっての利益の追求のためであることはあまりにも明確であった。

他方のラビンは、しかし、クリントンの演出に協力している余裕はなかった。最大の難関と見られたパレスチナとの合意、そしてアラファトとの握手は、彼自身にとつても、ユダヤ人全体にとっても、複雑な感情を創り出した。ラビンにとっては、それを足掛かりに一挙的なアラブ・イスラム諸国との「正常化」のための避け通れない(?) 苦々しい儀式がアラファトとの握手であった。

早々にワシントンを引き上げて、突然(?) モロッコを訪問し、公式にハッサン国王と会談することを優先した。アラブ・ボイコットの解除、国交の正常化が迫っていることを宣伝する必要があったからである。ラビンやペレスが何度も「イスラエルがすべてのアラブ諸国と和平をつくる時がきた」と強調したのは、パレスチナとの調印よりも、アラブ、第三世界との関係の第一歩であること、そこにこそイスラエルの目的があることを語っている。クリントン政権が音頭を採っているパレスチナへの国際支援

でも、そうした国際的な資金の流れがイスラエル経済に有利なこと、「中東のシンガポール化」を利用してすることを宣伝している。

ラビンにはもう一つのお家の事情があった。ついに内相デリの辞任(九月二日)となり、連立政権の基盤が弱まったことである。デリを首班とするシャス党は、今後の連立協力のためにもパレスチナとの合意に関する国民投票を要求したが、ラビンはそれを回避した。

クネセツでは賛成六一、反対五〇、棄権九(棄権はシャスの六人とリクードの元警察相ミロなどの三人)で通過した。ラビンは、「圧倒的多数が合意に賛成していることが証明された。これで国民投票の必要はない」とした。世論調査でもユダヤ人の多数派が合意に賛意を示している。が、もし国民投票になれば、「テロ行為」一つで逆転しかねないのが実情であり、それが判っているからこそ、ラビンは国民投票をなんとしてでも回避したかったのである。

「たとえて言うなら、イスラエル世論は、コップに水が滿ペイで、もう一滴落とせばこぼれかねない状況にあり、したがってラビンはとてもシリヤやレバノンとの撤退問題を云々できない」、と言われている。だからこそ、ラビンは、まずパレスチナとの合意の実質化を優先し、シリア非難を展開してその解決を先送りしているのである。

それは、ラビン自身が公言してきたマドリッド方式の拒否、すなわち、個別交渉の積み重ね方式である。そもそも、秘密交渉自身がマドリッドの創設者である、ハーリッドとハニーのハッサン兄弟がファタハの中央委(一〇月八日のペレスとの会談も拒否した。フート(在レバノンPLO責任者、資料参照)やマクダ(在レバノン軍事責任者)の非難とアラファト議長の辞任要求などなどとなっている。

PLOの再建を確認した(資料参照)。PLOの再建を確認した(資料参照)。アラファト議長は自治政府の治安責任者を指名した(九月一八日)が、これに対しても、同僚への弾圧を任とすることを拒否するという者が何人も出ている。また、これに関連しては、

「PLOは自治地域で人権の尊重を明確に宣言すべきである。警察部隊が弾圧部隊になるのではという不安があるのでから、それは必要だ」といった声があちこちから出されている。ファ

タハの創設者である、ハーリッドとハニーのハッサン兄弟がファタハの中央委(一〇月八日のペレスとの会談も拒否した。フート(在レバノンPLO責任者、資料参照)やマクダ(在レバノン軍事責任者)の非難とアラファト議長の辞任要求などなどとなっている。

一〇月一〇日からのPLOの中央評議会(PCC)を巡っては、次回の国民会議(PNC)で同議長を辞任すると発表しているアブデル・サイーハ師が、「こうした重要な問題はPNCで決定されるべきであり、PCCで決定しよう」というのは非合法である」と非難(九月二八日)。翌日、アラファト派が、被占領地からの代表七〇名も参加と発表したことから、そのいいかげんさへの非難がいっそう大きくなつた。

そしてそれは、「アラファト派がやってきて採用した時に、自らの手で自らをPLOから追放した」(A・A・ムスタファ)とみなし、ファラファトは、PLO憲章をないがしろにし、パレスチナ人民を無視したイスラエルとの合意を放した」という、被占領地人民の、将来への不安をかきたてるこ

ド方式の否定であった。

だがそれは、アラブ諸国との正常化やアラブ・ボイコットの解除を自ら逕ら逕らすることになつてゐる。加えて、クネセツで賛成投票をしたアラブ・イスラエル人(すなわち、イスラエル国籍のパレスチナ人)からも今後の(パレスチナとの)交渉への参加を要求する声が出てくるなどの問題に直面している。

ニ アラファト議長の勝利と苦惱

一九年ぶりの米国、それもホワイトハウスとその後の米TVネットワークなどを存分に活用した展開。それは、八二年のレバノン侵略時から追求してきた、国際政治の中に確固とした基盤を創り出すという、アラファト議長の政策の勝利とも言えた。彼自身が、九月一一日に、

「パレスチナ人民は新世界秩序の中東における政治地図の中に足場を持つことになった」と語っていることにもそれは示される。それは、彼が強調する「エルサレムを首都とするパレスチナ国家」への期待をパレスチナ人民に与えた。

しかし、米やイスラエルはパレスチナ国家は認めないと何度も強調している。

加えて、イスラエル側は、「エルサレムはユダヤ国家の支配の下での統一が恒久的なものであつて、決して再分割はない」ことを強調し、難民問題においても、「第二段階での交渉の対象であつて、今から数値を云々する問題ではない

になつてゐる(これに關しては、第四節でも触れたい)。

三 アラブ諸国の反応

アサド・シリヤ大統領は、九月二〇日付のエジプトのアル・アクラム紙とのインタビューで、「われわれは(パレスチナの合意に)支持も反対もしない」、が、「同合意はすべてをイスラエルの手に残すことになった。もちろん、アラファトは一定の喜びを手にしたであろう。(だが)彼は彼自身を大きな監獄に入れてしまった」、「アラファトとPLOが裏で交渉したといふことは、アラブにとって痛苦な現実である。秘密交渉にはなんらの論理的正当性もない。私の見解では、パレスチナとアラブは損をした」、秘密交渉は「アラブの立場を弱めた」と批判した。

同じ日から開始されたアラブ連盟外相会議での重要な第一歩」と評価しつつ、「それは即時の他のすべての戦線での歩み、(すべての戦線の)被占領地からのイスラエルの撤退を保証する歩みによつて完了されるべき」としたうえで、は、一応、「パレスチナ・イスラエル合意はランド・フォー・ピースの原則を実現する方向で、一応、「パレスチナとアラブは損をした」と批評した。

さらに、難民問題、エルサレム問題の解決の重要性を強調するとともに、「パレスチナ領土の占領が終決するまで、インティファーダをあらゆる形で支持する」ことをも確認した。

すなわち、合意そのものには反対はしないが、単独和平となつたことへの批判、エルサレム問題や難民問題の未解決や反占領闘争を放棄した

ことへの批判が示される声明となつた。アラブ各国はイスラエルとの和平へと流れる方向にあるが、イスラムにとって第三の聖地であるエルサレム問題があいまいな合意では、全面的にそれを支持するわけにはいかない。パレスチナ問題は、パレスチナだけの問題ではなく、アラブ総体の問題と言われた由縁がそこにあつたのだし、アラブの連帯をないがしろにしたあり方への不満が示されてもいる。また、それは、初日のアラファト議長の演説への反応ともなつて現われた。

そうであるからこそ、クウェートやサウジはPLOとの正常化、PLOへの直接支援に足踏みを示しているのであり、また、米＝イスラエルが圧力をかけているアラブ・ボイコットの解除に関しては、「イスラエルの大量破壊兵器の問題の解決をも含めてこそ、成立する」という濱岸諸国機構事務局長の発言（九月二十四日）となるのである。

宗派政治を基礎にしているレバノンでは、難民の定住化＝国民化となれば、宗派政治の勢力団にも大きな影響をもたらす。ブエズ外相などが、PLOに「難民問題ではどういう合意ができているのかを示せ！」と迫っているのは、経済再建にもたらす影響に加えて、こうした政治利害もからんでいるからである。

最初、PLOの独走を批判しつつ、その支持に変わり、自らも九月一四日に「議題合意」に調印したヨルダンも、パレスチナ合意の曖昧さのゆえに、困難な立場に立っている。ヨルダン

の投降にノー！」と叫んだことにも、それは示される。

合意に批判的であったシャフィ氏は、「自分の役割はマドリッドから合意まで。それはもう終わつた」として、自治政府への参加を拒否する」と発表。

人民の間では、パレスチナ警察や自治政府の官僚として入ってくるであろうアラファト派による政治展開、極端に言えば「独裁体制」への不安が拡大している。アシュラウイ女史が、「古い道員と体质で対応すれば困難になる。質の高い人、適切な人材を適切な仕事に」と民主化を求めた（一〇月九日）のも、そうした人民の不安、不信の反映である。

他方、離散の民衆はどうかというと、六七年難民は、帰還の可能性があるが、これとてはたしてどの程度が認められるのかは不明。上に触れたように、ヨルダン政府が「二重国籍は認められない、国籍を選択せよ」と迫つても、選択のしようがないのが実情である。さらに、四八年難民には、将来の帰還の可能性はまったく不明。というよりも、各国への定住化＝国民化を強要され、パレスチナのアイデンティティ喪失することが、現実の問題となつてきている。

レバノンのある新聞が在レバノンのパレスチナへの世論調査をしたところ、合意を支持するが五九%あつたが、同時に合意を売り飛ばしとみなしている者が六三%あつたという（一〇月二日発表）。アラファト議長の華々しい登場と将来へのバラ色の発言に人民は期待をかけていくであろう。

月九日には、イスラミック・ジャーナル地区でユダヤ人三人を殺害し、同日、PFLPは海上からの侵入作戦を開いた。「和平の樹立」という国際報道とは逆に、被占領地内外での反イスラエル闘争は、今後いつそう拡大していくであろう。

ことへの批判が示される声明となつた。アラブ各国はイスラエルとの和平へと流れる方向にあるが、イスラムにとって第三の聖地であるエルサレム問題があいまいな合意では、全面的にそれを支持するわけにはいかない。パレスチナ問題は、パレスチナだけの問題ではなく、アラブ総体の問題と言われた由縁がそこにあつたのだし、アラブの連帯をないがしろにしたあり方への不満が示されてもいる。また、それは、初日のアラファト議長の演説への反応ともなつて現われた。

そうであるからこそ、クウェートやサウジはPLOとの正常化、PLOへの直接支援に足踏みを示しているのであり、また、米＝イスラエルが圧力をかけているアラブ・ボイコットの解除に関しては、「イスラエルの大量破壊兵器の問題の解決をも含めてこそ、成立する」という濱岸諸国機構事務局長の発言（九月二十四日）となるのである。

宗派政治を基礎にしているレバノンでは、難民の定住化＝国民化となれば、宗派政治の勢力団にも大きな影響をもたらす。ブエズ外相などが、PLOに「難民問題ではどういう合意ができているのかを示せ！」と迫つているのは、経済再建にもたらす影響に加えて、こうした政治利害もからんでいるからである。

最初、PLOの独走を批判しつつ、その支持に変わり、自らも九月一四日に「議題合意」に調印したヨルダンも、パレスチナ合意の曖昧さのゆえに、困難な立場に立っている。ヨルダン

に投票する権利があるのかないのか、本当に帰還できるのかどうか不明という状況では、選択を突き付けられても、選択のしようがないというのが現実である。

四 パレスチナ人民の動向

被占領地の人民の圧倒的多数が交渉そのものに反対を表明していたことは、これまでの号にも述べてきた。ところが、調印式直後の世論調査は、合意への支持が圧倒的多数になつた。先の見えない長い闘争と弾圧、そこから派生する極端な貧困、そして他方でのアラファト議長の華々しいホワイトハウスへの登場と米TVなどへの出現、そして彼の口から出る将来の展望などなどは、パレスチナ人民に期待を抱かせるに十分であった。

しかし、緩められたとはいえ封鎖は解除されないままであり、占領軍の弾圧は継続し、ラビンをはじめとするイスラエル当局者の発言（弾圧、エルサレム問題、国家など）は、早くも期

待から不安、不信へと変わつてきている。アラファト議長もラビンあての抗議文を送った。だが、イスラエル側からは、「PLOは自らも対テロ行動で合意している。したがって、これは合意違反ではない」（ペレス）、「パレスチナ警察がやるべきことを先取りしてやっているのであり、非難されるいわれなどない」（一〇月六日、ラビンに同行した高官）といった発言が相次いだ。

これらは人民に、合意がなんら実態を変えないだけではなく、パレスチナ警察が果たす役割への不安、不信を増大させている。一〇月一日に現場にいた一人が「私は和平を祝賀したことを悔やむ。イスラエルは和平を望んではいない」と口にし、人民が「和平にノー！イスラエルへ殺され、一六人が逮捕された。

PLOは、これを合意への違背として非難し、対派への弾圧はこれまでとまったく変わらず、一〇月一日には、ガザ地区でハマス・メンバーが隠れていたと、一三家屋を破壊し、一人が爆

五 結語に代えて

だが、問題は、パレスチナが、一方でアイデンティティの喪失＝解体、他方での二つのPLOの結束の柱であった。ところが、占領の終決するままで合意に調印された。アラブ世界から「裏切り者」と烙印を押されたサダトでさえ、シナイ半島からの軍と入植地の撤退を確実にしてから調印した。アラファト議長がいかにバラ色の将来を語ったところで、相手の側が不斷にそれを否定したのは、不安、不信が沸いてくるのは当然であろう。

だからこそ、一〇組織は、一時的には人民が合意を支持する側についたとしても、大義は自分たちにあり、人民は必ず自分たちの側に立つ、とみなして反占領の闘いを強化している。

占領の終決までインティファーダはつづくと発言したアラファト議長は反占領の闘いの停止を命令した。そして、その後から、大規模な弾圧。どうなつてているのだ、どこが和平だ、といつた声が拡大している。

連日のようなイスラエル軍に対する闘い。一〇月四日にはハマスのメンバーが身体に爆弾を巻いてラマラの軍本部に決死作戦を展開し、イスラエル兵など三〇人の負傷者を出した。一〇月九日には、イスラミック・ジャーナル地区でユダヤ人三人を殺害し、同日、PFLPは海上からの侵入作戦を開いた。「和平の樹立」という国際報道とは逆に、被占領地内外での反イスラエル闘争は、今後いつそう拡大していくであろう。

パレスチナ内部には深い亀裂が存在する。だが、民族の大義、アイデンティティを守り、正当な和平を確立していくこうとする点では一致している。そこに、分裂の固定化ではなく、再度、統一した隊伍を創り出していく要がある。内ゲバの回避という点では一応全体が一致し

ている。闘いの方向を敵に限定し、その中で隊伍の統一を作り出すこと、そして、どう闘いと交渉を統一し、どう民族的な目的、国際的決議に沿った正当な和平を達成しうるか。そのためにも、民主的な在り方が必要であろう。

天安門では人権問題を叫んだ帝国主義が、モスクワの殺人行動を支持した。そこにも、帝国主義の言う「民主主義」の実態が暴露されている。そうした「民主主義」ではなく、眞に人民の意志を反映した民主主義をどう創り出していくのかにこそ、正当な和平と民族目標達成の鍵が存在する。

シオニストはわれらが人民との和平を望んでいるのではなく、その下への支配を、そしてわれらが人民を踏み台にして、米帝国主義の支援のもと、あらゆる資源、人民の力を含めた、中東地域全体における経済支配を欲している。闘いの停止は、シオニストと米国の計画を援助することであり、われらが人民の権利の永遠の喪失をもたらすのみである。

「われらが力強い人民、大衆へ」
民族統一指導部（以下、UNL）は、われらが民族の領域での変化、われらが民族問題における陰謀を熟知している。UNLは、占領軍を攻撃し続けること、最後の一兵がわれらが被占領下の地を離れ、エルサレムを首都とした独立国家を樹立するまで、闘いを継続することをはっきりと約束する。また、われわれは、正しい方針での闘い、すなわち、内ゲバを否定した、闘いの継続を明確にするし、同時に、人民大衆が、内ゲバに反対し、そうした策動を推し進めんとする者たちに対し、人民を統一することに自覚的であること、問題に対しても即自的対応することのないよう、よびかける。即自的対応は、数万の人民が殉教者となつたわれらが目標の達成において、決していい結果を作りはしない。

資料 インティファーダの声よりも強力なものはない

民族統一指導部呼びかけ、第九九号

「われらが偉大な人民、大衆へ」

解放、独立のための闘い、インティファーダの大衆は、われらが殉教者の血と、その血がわれらが大地と混ざりあつたものに忠実であり、帰還とわれらが将来を決定し、独立パレスチナ国家建設という人民の目標を達成するため闘い続けることを明確にしている。われらが大衆は、負傷した人民、獄中者の痛み、苦惱を忘れはしないし、彼らが民族の大義のために闘い、民族目標を達成するために闘つたことを忘れたことはしない。

「われらが戦闘的な大衆へ」

者との連帯のさまざまな活動の週。 民族統一指導部 九三年一〇月九日

一〇組織声明（抄）

九三年一〇月九日

しい段階において責任を持つて対応し、敵が求めているパレスチナの内ゲバに陥ることのないよう、よびかける。

7、エルサレムは永遠にわれらが首都である。それゆえ、UNLは、エルサレムのアラブ的な要素の防衛の大切さを強調し、ユダヤの首都にせんとする策謀と対決すること、そのためにも予定されている同市の選挙をボイコットし、それへの協力を拒否するよう、よびかける。

8、UNLは、われらが人民大衆とわれらが諸機関に、ガザで家屋を破壊された家族との連帯を組織するよう、よびかける。

9、UNLは、占領軍の人権無視、被占領地での殺人、家屋破壊、大量逮捕などのジュネーブ条約違法行為を非難し、同時に、国際社会がこれらの一停止を働きかけるよう、よびかける。

「われらが戦闘的な人民、大衆へ」

UNLは、われらが人民の目標を達成するまで闘いを継続することを明確にし、そのためにも以下を行なうよう、よびかける。

*一〇月八日、アル・アクサ・モスクの虐殺記念日。エルサレムとアル・アクサはわれらがものであり、同殉教者、インティファーダの殉教者とその家族との連帯のためにも、アル・アクサへ行くことを組織せよ。

*一〇月九日、インティファーダ開始記念日。ゼネストを。

*今月の最後の週は、殉教者、獄中者、負傷者が存在する闘いの拡大の日。

また、われわれは、この投降の合意に調印したことである。

UNLは以下を確認する。

1、被占領下のわれらが人民、大衆は、占領軍に対する闘いとしての、インティファーダを樹立まで続くし、それはこそがわれらが人民の選択である。

2、大衆的なインティファーダは、占領軍を追い出し、エルサレムを首都とする独立国家の樹立まで続くし、それはこそがわれらが人民の選択である。

3、インティファーダを防衛し、支持すること、UNLの指示に沿つて、インティファーダを繼續し、占領軍、入植者に対する闘いを繼續することをよびかける。

4、UNLは、われらが獄中者が統一を第一にし、それを防衛することをよびかける。獄中の者の釈放云々は、イスラエルが世界に自らの「善意」の仮面を誇示するためでしかない。

5、UNLは、イスラエルがわれらが人民の息子たちへの弾圧、捜索、逮捕を繼續することに対し、イスラエルのワナに陥ることのないこと、対イスラエル闘争を繼續すること、そして人民が彼らを支援するよう、よびかける。

6、UNLは、われらが人民大衆に、この新

た者とのいっさいの交渉を拒否する。なぜなら、われらが人民はこうしたものを作つたく望んではいないからである。

五、一〇組織は、「自治」政府の警察部隊が敵と同様の部隊になるとみなす。なぜなら、それはシオニストのコントロール下におかれらの息子たちがこの警察部隊と協力することを拒否し、この部隊を包囲し、その活動が不可能になるようになることを、よびかける。

六、一〇組織は、被占領下のいかなる地域においても、イスラエル（占領軍、入植者）に対するあらゆる闘いの権利が存在することを確認する。

七、われわれは、アラブ諸国、諸政府、友好的な諸政権、そしてすべての人民に、この合意に反対することへの支持と、シオニストとの闘い、合意を破壊する闘いへの支持、支援を要請する。いうまでもなく、この合意は民族とモスクの大義に反し、帝国主義・シオニストに奉仕するものだからである。

アラファトは辞任せよ——フート（抄）

アッディヤール紙、九三年一〇月六日

その任を担い、先日、PLOとイスラエルの合意に反対して同機構の執行委員会を辞任した、フー

ファタハの高官でPLOの治安責任者である、バラウイは、イエメン当局がイエメンのサヌアでのファタハ＝ハマス会談を設定していることを歓迎しつつ、ファタハは原理主義者が設定した前提に合意できない、と語った。PLOに入っていないハマスは、ファタハ代表との会談の用意があるが、ファタハの代表はアラファトとM・アッバースではないことを条件とした。「ハマスもいかなる交渉主体も、交渉者を限定したり、排除したりはできない。そうした要求は政治的民主的な原則に反する」とバラウイは語った。

アッバースとペレスは九月一三日にホワイトハウスで調印し、その式典にはアラファトとラビンも参加したことは周知のことである。合意は、第一段階として、ガザ、ジェリコの限定的な自治を認めるというものであるが、反対派は、

抄ノ山ノチナ中央講議会をめぐる

アル・ハヤト紙、九三年九月二九日

イスラエルはガザ、ジエリコを「放棄」するかも知れないが、被占領地をイスラエルの下にキー プしようとしていると非難し、合意への拒否を表明している。彼らはまた、エルサレム問題の解決に失敗したことを見難している。

ハマスは、六七年被占領地でのパレスチナ「国家」という概念を拒否し、イスラエルの破壊、パレスチナ全土におけるパレスチナ国家の創設を求めている。

中央評議会は一〇一名で構成され、パレスチナ国民會議（PNC）とPLO執行委員会との中間的存在であって、PNCとPNCの間の期間の決定権を有している。

とを明確にするだけだ」と語った。この両者は、いずれもアンマンで話したのであるが、ダマスカスのDFLP報道官D・テルハミは、「アラファトは彼の政策に十分な支持を得ることになっている。それは「多数票を得るために新たな不法な手段を用いるからだ」と語った。ところで、パレスチナ人の間では、パレスチナの資本家が新たな政党を形成するという噂が飛び交っている。アラファトが富裕なパレスチナ人にガザ、ジェリコの自治区への投資よびかけの招待を発した。合意に基づくパレスチナ当局の運命は財政的、経済的な支援が死活的な問題になるが、こうした投資家はパレスチナ政治のなかに基盤を守つたのにも、自らの党を形成

しようとするのは理にかなつたことであろう。そして彼らが、再建に参加することを通して、人民からの多大な尊敬を獲得するだろうことにも疑いはない。

だが、噂が現実になることや、それを公然と語ることをためらわせているのは、大きな変化を恐れているからである。変化は、PLO内に「新たな敵」を作ることになるからである。

要は、「パイの分け前が持ち去られる」ことであり、別の言い方をすれば、インティファードで闘ってきた戦士たちに代って、ブルジヨアがハバをきかせることになる。「こうしたペレスチナの資本家は少数だが、大きな富を有し、いうなれば、戦士たちが門を破壊した後の国家の基礎建設の魔法の鍵を有している」とある分析家も言う。彼らは建設の基礎条件を提示する

1993年11月30日 第94号

ト氏はPLOの指導者アラファト議長に対しても彼は現在のパレスチナ人民の闘いに適切ではなく、辞任をすべきであるとよびかけた。

フートはアラファトが多くの場合に一方的で独断的な行動をとっていると非難した。「私は私をインドに追い出したものだ」と彼は言う。彼はまた、アラファトがリビアでの飛行機事故で一命をとりとめたとき、アラファトに対しても「われわれはどうして神が許したのか分からぬ。われわれは君を埋葬してやったのに、なぜなら君はあらゆるもの自らの手に握っているからだ」と語ったという。たとえば、アラファトの結婚ということでは、パレスチナ人はしばらく知ることができなかつた、と彼は指摘した。

フートは、基本的には、交渉を支持してきたソ連・東欧の崩壊と湾岸戦争の結果、最良の結果を得る手段の一つとしてそれがあると考えた。「しかし、合意の後、私はそれに反対する。なぜなら、彼らが目標に向つて何が起きたかと自問せざるをえないからである。私はパレスチナ人民にどこで、どのように扉が閉ざされたかを見てきたし、さらにつきの合意の将来がわかれらが希望、その目標の基礎的なもの、たとえば、自決、民族的なアイデンティティ、難民問題の解決といったものの達成が可能であるかどうか疑わざるをえない」

交渉團にとって最後の切札は被占領地におけるインティファーダであった。「今日、われわれが支払うことになった最高の代価は、このイ

ンティファーダ、イスラエル側を日常的に困にさせてきたものを、自分たちから沈静化さるという点にある」

また合意の内容は単にパレスチナ人に限らずアラブ全体に影響する。たとえば、「協調し、共通の行動をとっていこうとしていた、シリア、レバノン、ヨルダンを無視することになった。われわれは、仮に先に合意が成立しても、待べきであり、アラブの兄弟たちとの協調したり方をとるべきである。実際、ヨルダンはすでに一年前に基本合意が成立していたが、他の兄弟たちの進展を待っていたではないか。なぜなら、それに見習うことができなかつたのか。またパレスチナ問題は最後になるし、そうすべき私は考える。なぜなら、それはエルサレムと離散の人民というアラブ諸国に関わる大義を含んでいるからである」

実際、同合意は人民を混乱させている。「彼らはイスラエルとのPLO議長アラファトの同意というよりも、イスラエルと一人のパレスチナ人の合意とみなしている。こうした状況で、レバノンでの、ヨルダンでの、そしてシリアでの（私個人の、そしてわれらが人民全体の）存在、生活、安全保障といったことにどう責任を負ふべきか」

アラブ世界全体に関わることとして、いわゆる新世界秩序の下では、アラブのアイデンティティもなくして、単に中東とみなさんとしている。「世界がアラファートの組織を承認していることから、パレスチナ反対派にとって支援を取

り付けることは困難なこととアラファートは見ている。だが、PLOとイスラエルの経済合意によって、ジェリコなどでのパレスチナ人の生活は不可能なものにならう」

レバノンそのものに関しては、「こうした政治的な状況の中で、われわれはレバノンとシリリアの連帯はレバノンの利益にとって基礎的なまのであるとみなしている」

状況の分析がなされるべきであり、とりわけ過ちは目的意識的に拾いあげ、克服の努力がなされねばならない。だが、合意を暴力的に引っくり返すというのは反対である。「もしわれわれがこうした企画を失敗させたいと望むなら、最悪事態にはもちろんそうせざるをえないであろうし、それは可能だ」が、「それは単にアラファートの路線を修正させるだけであろうか？一部では暗殺によってでも、あるいは内戦によってでもそれを失敗させられると考えている。しかし、もしわれわれがこうしたワナにはまつたら、それはわれわれがガザ・ジェリコ合意の文書にはない規定に貢献することになる。イスラエルはもちろんその失敗を望んでいる。イスラエルは、パレスチナ人がパレスチナの土地に存在し続けることを望んではない。そうなつたなら、修正ではすまないであろう」

そうしたこと为了避免するために、「私の要求の一つは、アラファートの辞任である。彼は現在の段階を指導するのに適切ではないし、彼はそれをさらに複雑にし、成功とはほど遠いものに変えるだけであろう」

が、そこでは革命戦士たちの必要性を考慮に入れることはないであろう。彼らは、被占領地の多数派である失業者からの大きな支援を作り出し、現在のパレスチナ内の規則を変えることを可能にするであろう。

パレスチナ＝シオニスト合意の苦い果実（抄）

A・Q・タシユ、アラブ・ニュース紙、九三年九月一五日

「ガザ・ジェリコ第一」というパレスチナとシオニストの合意の最悪の現れが、パレスチナの文化的要因、主権問題を抜きにした、単なる政治問題、それもパレスチナ人全体ではなく、PLOにとつてのみのそれとしてなされた。合意は他の結果をもたらしてはいないが、それが不満と失望をもたらすことは疑いのないことである。

合意は、一部の分析家をして、「パレスチナ人民の守護者たることをやめ、彼らに彼らの問題に取り組ませよ!」もし彼らが受け入れたのなら、それは彼らの自由であるし、受け入れないなら、それもまた彼らの問題だ」と言わせしめている。

だが、パレスチナ問題は決してパレスチナ人民だけの問題ではない。それは、アラブ、モスクの問題でもある。この50年に渡って、パレスチナ人民がパレスチナの大義のために血と富を費やしてきたように、他のアラブ・モスクも程度の違いはあれそうしてきた。もし、一部の文化や民芸の大きな主体が育った。失われた土地のオリーブの木、オレンジの林がロマンチックな記憶として育った。カナファー・ヤダル・ウイシュがそれらを書き、帰還を夢見る歌が作られた。長年に渡るPLOの達成物がかなりの改善を作り出したとはい、二六〇万以上のパレスチナ人がいまだ難民である。

唯一ヨルダンのみが、パレスチナ人に市民権を付与している。ワシントンで調印された合意文書の第五は、エルサレム、入植地などとともに、難民に関する将来の交渉を述べている。しかし、同合意が広範な和平に導いたとして、も、パレスチナ人が呼ぶ「アル・ナクダ」（四年戦争）の難民のほとんどが彼らの家、郷土

られた人々に彼らの地に帰る機会を提供することになるうか?

ガザ、西岸、ヨルダン、レバノン、シリアのどのキャンプのどの子供に対しても、「どこから来たの?」と尋ねれば、彼らは誇らしげに「ジャファ」とか「ハイファ」とかその他の現在「イスラエルの固有の地」と呼ばれる地名を答える。帰還の権利は、PLOの最も基礎的な要求の一つであった。それはパレスチナ国民憲章にも記されている。五八〇万のパレスチナ人はこの問題がアラファートのユダヤ国家との取引で不当にも無視されたと感じている。

「シオニストの占領とパレスチナ人民の離散はパレスチナ人としてのアイデンティティと関係性をなくしはしないし、それを破壊するものではない」と同憲章は宣言している。帰還のための文化や民芸の大きな主体が育った。失われた土地のオリーブの木、オレンジの林がロマンチックな記憶として育った。カナファー・ヤダル・ウイシュがそれらを書き、帰還を夢見る歌が作られた。

長年に渡るPLOの達成物がかなりの改善を作り出したとはい、二六〇万以上のパレスチナ人がいまだ難民である。

唯一ヨルダンのみが、パレスチナ人に市民権を付与している。ワシントンで調印された合意文書の第五は、エルサレム、入植地などとともに、難民に関する将来の交渉を述べている。

しかし、同合意が広範な和平に導いたとして、も、パレスチナ人が呼ぶ「アル・ナクダ」（四年戦争）の難民のほとんどが彼らの家、郷土

への帰還を認められないであろう。その多くはすでにイスラエルによって掠奪され、破壊され、地形すら変わっている。

全面的な和平解決の一つとして、弁償の可能性があるが、これはイスラエル側がアラブの土地を離れたユダヤ人の弁償を要求することと引き合わせになるであろう。イスラエルは長い間PLOとの取引を拒否してきた。同機構が西岸、ガザだけでなくすべてのパレスチナ人のことに触れていたからである。

ガザの人口の半分以上にあたる五六万は難民で占められ、西岸には四六万が登録されている。難民問題は常にパレスチナの政治方向を決定する要因の一つであった。アラファートをはじめとするチュニスのPLO指導部は、ほとんどが四八年の難民で構成されている。

イスラエルには帰還法がある。五〇年に制定されたそれはすべてのユダヤ人に、彼らがどこで生まれ育ったかに関わりなく、彼らの郷土（イスラエル）への帰還の権利を与えている。P.F.D.Fといった過激な組織が難民の支持を受けている。彼らが合意への反対をいつそう声高く、いつそう戦闘的に展開しているのは当然と言えよう。

中東和平の道には多くの地雷が隠されている（抄）

A・タヘリ、アラブ・ニュース紙、九三年九月一八日

は彼らに限定したことだけだ、という主張も正しかったと言うなら、それはパレスチナ人の中にもそうしなかった者が存在するのが事実であり、そのことを云々はできない。

パレスチナ、とりわけPLOが受け入れたのは彼らに限定したことだけだ、という主張も正しかったと言うなら、それはパレスチナ全体、アラブ、モスク社会全体に影響するし、ユダヤがアラブ・モスクの地に政治、軍事、経済、技術などで侵入することに門扉を開くことになるからである。

シオニスト擬制国家が、彼らが郷土に侵入する能力を過小評価するのはわれわれを欺くことである。シオニスト擬制国家は拡張主義、植民地主義勢力の手先でしかない。彼らはそれを利用し、野望と目的を実現せんとしている。西側が合意への支持に走り、地域に大量の金を投入し、その目的を達成せんと急いでいるのはそこのせいである。

合意のパレスチナ人民への影響は大きい。もちろん、これまでの弾圧、不正義から一定の救いを創り出すし、生活に一定の改善をもたらすであろう。が、その代償は、彼らの自由、主権、正当な権利、領土などである。

アラブ・モスク社会のそれはまさに深刻である。これはモスクの連帯の終わりにもなりかねない。もちろんアラブ・モスクの間にもいくつもの対立があった。その最悪のものは湾岸戦争として、記憶に新しい。

パレスチナ難民は郷土を見つけられるか（抄）

一・ブラック、ガーディアン紙、九三年九月一五日

冷めてきつた今、その道に隠されている地雷に触れておく時であろう。

秘密交渉の細部が公表され、合意が比較的短時間になされたことが明らかになった。ノルウェイ・チャネルを通した七ヵ月間の交渉は約一四〇時間だったが、中心的な問題では一五〇〇時間だったという。

交渉の多くは雰囲気作りが中心だったし、その目的は双方がお互いの意図を明確にし、決定的な成功を達成することだった。双方はお互いを信頼すること、危険性を後で取り扱うことにした。その危険性に触れてみよう。

第一の危険性は、シリア、レバノンに関する問題の解決なくして真の和平はないことを示した。今はアラブ側が六七年以來反対してきたもので、例外としてエジプトがキャンプ・デービッド合意をもってこれを破ったのがある。

イスラエルは、個別交渉の原則を創り出した。これはアラブ側が六七年以來反対してきたもので、例外としてエジプトがキャンプ・デービッド合意をもってこれを破ったのがある。

だが、いまや、状況は変わった。イスラエルとシリア、レバノンの緊張は、被占領地の強硬派を勇気づけ、アラファートが作り出そうとしている政府機構の権威をダメにしようとしている。キャンプ・デービッドの経験は、パレスチナ問題の解決なくして真の和平はないことを示した。今は、パレスチナ問題の解決のみでは地域の総合的な和平に導けないことを示している。パレスチナの「暫定政府」が完全に確立されたとしても、イスラエルが地域における「もう一つ

現実的にとか、現実から学べとか言う者がいるが、それは既成事実化したものを追認せよとしない意味である。だが、それはわれわれが崇拜する原則に忠実と言えようか? あるいは、そとにならうか?

この問題は、パレスチナの宗教的精神的な側面に至る。敵ユダヤが宗教に依拠してパレスチナにニセの国を設立せんとしているのに、この基本的な側面を無視することはできない。エルサレムを、アル・アクサを、掠奪者の手に残すべきではない。

パレスチナ問題から宗教的、精神的、文化的な側面を取り払い、狭い政治問題にすることは許されない。アラブ・モスクの問題を無視することはイスラエルへの背信である。仮に、一部のパレスチナ人が受け入れたとしても、それは問題の死滅や解決でない。真に文化的なものを作ることにはならない。

合意がパレスチナの「國家」に導き、アラブ・モスク全体の方向、保全という問題と分離することは正当化の理由たりえない。

パレスチナ問題から宗教的、精神的、文化的な側面を取り払い、狭い政治問題にすることは許されない。アラブ・モスクの問題を無視することはイスラエルへの背信である。仮に、一部のパレスチナ人が受け入れたとしても、それは問題の死滅や解決でない。真に文化的なものを作ることにはならない。

合意がパレスチナの「國家」に導き、アラブ・モスク全体の方向、保全という問題と分離することは正当化の理由たりえない。

モスクの生活をしているが、合意は彼ら（もしくは彼らの先祖が）四八年にパレスチナを離れさせることにはならない。

百余名で構成される同評議会は、今月末に開催され、合意への賛否を問うことになろう、とPLO高官は語った。〈理論的な理由からであれ、個別利害からであれ、保留しているアラブの国は、もしPLOがパレスチナ人の多数の支持を証明したなら、それを続けることが困難になろう〉と、外交筋は語った。

彼らの可能な戦術はアラファトの正当性への挑戦であり、パレスチナ過激派をして信頼できる指導部を創設することであろう。〈リビアはそれを考慮していることのサインを見せていて、リビアの指導者カダフィは今月ハワトメに対して、彼が新たな指導部の選出のための大きな會議をリビア国内で開催することを示唆した〉、とPLO筋は語った。ハワトメは先週ロイターに、「新たなパレスチナ議会が、現在アラファトがその議長である機関に代わる、新たな指導部＝執行

アサドか H.I.C.Oの合意かシリアはどうでもないと判定したところで、彼は反対のためには、その成功の機会、援助の喪失、米国の不快、そして多分に地域的な孤立などに対する対策を持たねばならない、と外交筋は語る。ある西側の外交官は、「私は、彼（アサド）は合意を破壊することができるとは考えない。イスラエル側は座つて待ち、シリアはそれに抗する手段はない、ということだろう」。

「それはシリアの利益にはならない。多分、

合意を批判している。

しかし、チュニスのPLO高官によれば、同機構はシリアの公的な立場にのみ関心があると言ふ。シリアがパレスチナ人民とパレスチナの機関の決定を支持するかどうかである。H・アスフールは、「アサドがアラファトとの会談で語ったことに基づけば、PLOの中央評議会が合意を承認したなら、それはシリアを拘束することになる」と語った。

百余名で構成される同評議会は、今月末に開催され、合意への賛否を問うことになろう、とPLO高官は語った。〈理論的な理由からであれ、個別利害からであれ、保留しているアラブの国は、もしPLOがパレスチナ人の多数の支持を証明したなら、それを続けることが困難になろう〉と、外交筋は語った。

委員会を選出することを望んでいる」と語った。アラファートは、ワシントンでの記者会見で、「サッダム・フセインが合意をどう考えていると思うか」という質問に対して「彼は好ましく

初進放者たちの現状

「その反対になろう」、「合意を支持することはシリアルアがイスラエルとのゴランでの合意に到達するのを助ける。シリアル側も、アラブ諸国の共同のための会議で、一つの交渉での進展が他の交渉への支援になる、と何回か言つてきた」、と合意作りに働いてきたアスフルは語つた。

卷之三

支持する国家は多い
ユジット ミルタシ

「もし、シリアとの同盟国レバノンが支持の側に回れば、アラブ内部の顕著な反対派はパレスチナの内部だけとなる。イラクとリビアは自治合意に反対を表明しているが、彼らは孤立しており、行動の場所からも遠く、かつアラブの中での重要性もありない」とPLOや外交筋は言う。

シリアルは和平の鍵を握っている
J・ライト、ロイター、
一九三九年九月二二日

スを受け入れることを好まない。だが、それは、旧ユーゴ、アフガニスタン、旧ソ連、アンゴラなどなど、多くの問題を抱えている。すでに多くの西側の人々はパレスチナ問題はアラファト＝ラビンの握手が、まさに開始点でしかないのに、すべて解決したと見ていてる。

よう。だが、これから大切なことは開かれた政府であり、すべてのパレスチナ人が決定過程に参加すること、将来のいかなる失敗においても責任を共有するシステムである。責任を彼個人にというあり方は、裏返せば、すべての非難も彼にということなのである。

第五の危険性は、世界がパレスチナのことをすぐ忘れてしまうことである。世界は悪い（ニューリ

- 反対デモに軍が攻撃、一人死亡四〇人負傷。
- また、軍はエルサレムでの支持デモにも攻撃。
- ・ホラニも執行委を辞任、この間に六人目。
- ・アラファト、合意はわれらが独立国家建設、ヨルダンとの連邦へと導く第一歩。
- ・難民問題、エルサレム問題などは交渉で討議される。
- ・被占領地、イスラエル軍への攻撃三つ、兵士三人死亡四人負傷、バス運転手一人死亡一人負傷。一人三人死亡二人負傷。軍はエルサレム地区の二つの家を封鎖。
- ・在ヨルダン・パ、合意を非難し、合意を反古にする民族戦線の形成をよびかけ。
- 九月一三日
- ・パ人民は新世界秩序の政治地図の中に、足場を持つことになったと強調。
- ・被占領地、イスラエル軍への攻撃三つ、兵士三人死亡四人負傷、バス運転手一人死亡一人負傷。一人三人死亡二人負傷。軍はエルサレム地区の二つの家を封鎖。
- ・ホワイトハウスでの調印式（本文参照）。
- ・被占領地（内外）、一〇組織およびかけのゼネスト&デモ。支持派は祝賀。ラマラで、イスラエル軍パトロールへの銃撃。
- ・レバノン、ベイルートで合意反対のデモに軍が発砲、九人死亡四〇人負傷。ラシャディー
- エでも二人負傷。
- 九月一四日
- ・被占領地、軍への攻撃二つ。兵士一人死亡四人負傷、一人一人死。
- ・ヨルダン・イスラエル、議題合意に調印。
- ・ラビン、ペレス、モロッコ訪問。
- 九月一六日

- ・ナブルス、検問でパ、人射殺された。ガザで、反対派の集会に軍が発砲、四人負傷。
- ・アラファト、すでに多くが治安部隊の訓練についている。
- ・アシュラウイ、暫定政府は被占領地内および離散の人士で構成される。
- 九月一七日
- ・被占領地、パ各派が内ゲバ防止で合意。
- ・ハバシュ、合意の廃棄、インティファーダの拡大、民族的イスラム的統一戦線をよびかけ。
- ・南部、レジスタンスの作戦（三つ）。
- 九月一九日
- ・UNL98号（P.F.、D.F.などが新しい指導部を形成）、合意はインティファーダ開始以来の大衆の要求の最小限をも満たさないと非難。同時に、内ゲバを回避し、すべての力を敵、占領軍に向けるよう、よびかけ。
- ・ガザ、ファタハのタカが裏切り者一人を射殺。
- ・ウジとピストルを奪取。
- ・ヨルダン高官、米国が教科書から反イスラエル部分の削除を要請してきた。
- 九月二〇日
- ・南部、レジスタンスの攻撃（四つ）。
- 九月二一日
- ・被占領地、ファタハ、停戦を発表。他方、ファタハのガザの責任者が殺された。
- ・アラブ連盟外相会議、合意は包括的な和平への第一歩。
- インティファーダへの支持とイスラエルの全面撤退を要求。

- ・南部、レジスタンスの攻撃。SLA一人負傷。
- ・南部、レジスタンスの攻撃。SLA一人負傷。
- ・ガザ、ファタハ・メンバー三人の逮捕。それに対する人民の鬭いに発砲、一人死亡。
- ・パ知識人、PLOは自治地域の人権尊重に関する宣言をすべき。
- ・イ・ジ・ハード、イスラエル入植地にロケットを射つたと発表。
- 九月二三日
- ・被占領地の世論、合意支持が六八・六%。
- 九月二四日
- ・テルアビブ、ユダヤ人殴り殺される。
- ・PLO経済高官、われわれはイスラエル経済のためのトロイの馬にならない。
- ・南部、レジスタンスの攻撃（二つ）、SLA三人死亡。
- 九月二五日
- ・D.F.、アラファトの軍事行動停止およびかけはレジスタンスの戦士たちを拘束しない。
- ・ハバシュ、アラファトがイランを非難したことを批判。
- ・対イスラエルの闘争、インティファーダは継続する。が、内戦はいかなることがあっても回避すべき。
- 九月二六日
- ・シャフィ、自治政府に参加する意図はない。
- ・私の役割はマドリッドから合意までのもの。
- ・カドゥミ、国連総会でクリストファーと会うが、ペレスとは会わない。

だが、彼らは勝利をかみしめているようだ。「これが、作られ、そして主体的に解体される最初のパレスチナ・キャンプになるわけだからね。われわれは必ず帰ると言ってきた。すでにわれらが兄弟たちの半数近くは帰った。だから、悲しいと同時にうれしいというわけさ」とアリはつっこみした。

彼らの主張、断固たる対応、そしてレバノン政府の受け入れ拒否などが、イスラエルに問題を抱えさせた。

ここの方は獄中に比べて自由ではある。「獄中にに入れられるのは、もちろん不当ではあるが、パレスチナの外にいるよりはマシかも知れない」とはアリ。「獄中はわれわれには当たり前のことなんだ」とやはりこのテントへ移ってきたH.シェヘルは言った。彼は、インティファーダの中で何度も獄中へ入れられた。そのために、四年前から婚約者がいるものの、結婚もできないという。ランティスイによれば、イスラエルは、合意反対の演説を恐れて、九月九日の帰還者からモスクの僧のほとんどを除外したという。イスラエルは、ガザ、ジェリコ合意の時点で平穏な宗教活動を保たせようというのである。アリもまた、そうした僧の一人なのだ。

やはり西岸のヌル・アッシャムスの僧であるF・モハンマッドは、「イスラエルは半数の帰還を認めたが、その全員を獄中に入れた。多くは家や病院から狩り出されて、追放になったというのにだ。そのうち、釈放されるというが、これはまったく不當な話だ」と憤慨した。モスクの演説だけではなく、「英雄」たちが人民に合意反対を訴えること、その影響力を恐れたシオニストの措置である。

「われわれは和平に反対しているわけではない。われわれは平和を愛するし、われらが宗教は平和を求めている。だが、和平と投降とでは大きな違いがある」とは、ランティスイ。イスラエルの占領を認め、獄中者を見放し、難民を見放し……ガザとアリーサ（ジェリコのアラブ名）、「自治」と投資、「これではわれらが領土を金のために売るに等しい」

それを受けてドウェイクが、「アラファトはイスラエル国家を認めたが、イスラエルはパレスチナ国家を認めようとはしていない。こうして「自治」を限定的なものにした。またアラファトはイスラエルに対して、イスラエル人の安全だけではなく、パレスチナ人にに対するイスラエルの治安上の権利も認めた。サダトはエジプトの領有権と入植地の撤去を確実にした後で、調印した。だが、アラファトはあらゆるもの放棄した。パレスチナ国家、帰還の権利、領土権、エルサレム問題などなど、何も保証されていない。これら根本問題を抜きにした合意はまったく意味がない。アラブ世界はサダトに「裏切り者」とレッテルを貼ったが、アラファトに対してどんなレッテルを貼ったらしいんだ」と語った。

アラファトが、「安保理決議一四二、三三八を基礎にした正当な権利」を云々していることに対して、彼らは苦笑した。「正当な権利」という意味では、国連決議一九四があるが、そのようにだ。そのうち、釈放されるというが、これはまったく不當な話だ」と憤慨した。モスクの演説だけではなく、「英雄」たちが人民に合意反対を訴えること、その影響力を恐れたシオニストの措置である。

では、アラファトに對して「裏切り者」、「投降者」として打倒をよびかけるのかという点に関しては、「武力で反対はしないよ。われらが反対は民主的になされる」と、同胞の血を流すことへの懸念と人民は自分たちの側にあるといふ確信に満ちて、ドウェイクが答えた。傍らにいたG・エラドが「アラファトを殺したところでも、われらが大義を救けることにはならんさ」ときずつてるように口をはさんだ。

実際、彼らは被占領地の人民に内ゲバをやめるよう、よびかけを行った。チュニスで発表された内ゲバ防止の宣言が、逆に人民の不信と不安を大きくしたのに対しても、彼らのそれは人民に安心をもたらした。

重要日誌
一九九三年九月一一日～一〇月一〇日

九月二七日

- ・ハマス・PPF IDF、パ・人民会議をよびかけ。会議で合意を破棄する戦略を決定し、民族的イスラム的な指導部を被占領下の郷土に樹立をとよびかけ。

九月二八日

- ・シャーネス、アラファートのパレスチナ入りは一月一二日。同日から、パ警察は活動を開始。サイ・ハ師、合意のような大きな政策はPNCで決定すべきで、PCCにその権威はない。

九月二九日

- ・西岸、ジエニン地区で、ファタハ六人逮捕。

- ・PLO、一〇月一〇日のPCC開催、新たに七〇名の議員を加えると発表。

- ・九月三〇日
被占領地、逮捕に抗議のゼネスト。合意以降初めてのファタハのストよびかけ。

- ・一〇月一日
パ支援国際会議、四七カ国。クリントン&クリストファー、「大いなる成功」を自画自賛。

- ・一〇月二日
被占領地、大搜索。ガザで二三家屋破壊、ハマスの二人殺され、一六人逮捕された。西岸では、パ女性が入植者に殺され、もう一人も負傷。民から、これが和平の姿という批判が続出。

- ・ハッサン・ヨルダン皇太子、ボイコットの除去は自殺行為だ。中東和平のためにはイランをも含むべきである。

・南部、イスラエルがまた国境を変更。約四キロに渡って、鉄条網を二〇〇メートル動かした。

一〇月三日

- ・ガザ、逮捕抗議のゼネスト。軍のパトロールへの銃撃。西岸では、入植者が射たれて負傷。

一〇月四日

- ・西岸、ラマラのイスラエル軍本部へ、爆弾を体に決死作戦。イスラエル兵など三〇人負傷。

- ・アラファト、パの地にパの旗を立てるこの重要性を強調。

- ・ハニー・ハッサン、合意はつぶれる。パ人民の熱望と合致しないからである。

- ・シャラー（国連総会で）、シリアは包括的な和平を求める。

- ・和平、安定、豊かさは占領や他者の権利の否定との共存はできない。

- ・九月三〇日
和平、安定、豊かさは占領や他者の権利の否定との共存はできない。

- ・一〇月五日
ガザ、イスラエル軍パトロールへの銃撃。他方、「特務」がファタハ活動家を投降後に射殺。また、イ・ジハードのメンバーも射殺された。

- ・一〇月六日
南部、レジスタンスの攻撃（二二）。

- ・一〇月六日
被占領地、アラファト・ラビン会談抗議の人々の鬭い。四人負傷。

- ・一〇月六日
南部、レジスタンスの攻撃（二二）。

- ・一〇月六日
アラファト・ラビン会談。四委員会設置などで合意。

- ・一〇月七日
カドゥミ、合意に反対、その修正に努力する。

・ナプロス、刑務所への抗議デモ。パ・イスラエルの平和団体が共同で。

・南部、レジスタンスの作戦、イスラエル兵一人負傷。

一〇月八日

- ・マクダ、合意反対、アラファトは辞任せよ。

- ・南部、レジスタンスの攻撃、イスラエル兵一人負傷。

一〇月九日

- ・ジエリコ地区で、イスラエル人三人の射殺。

- ・海上からの侵入作戦。

- ・PLO、アラファト暗殺計画を摘発。

- ・アシュラウイ、古い体質を批判、民主化を。

- ・一〇組織、自治合意拒否、インティファードの新統一指導部の形成、新たなPLO指導部の形成へ向けた国民大会の開催などで合意。

- ・ハラウィ、レバノンとシリアの分断計画に反対し、両国の全面的な協調を継続する。

- ・一〇月一〇日
ガザ、手投げ弾攻撃、イスラエル兵一人負傷。

- ・PCC、開催（イスラエルのアラブ民主党からもオブザーバー参加。他方、ハニー・ハッサンは解任され、代わりの者が出席）。アラファト、合意は「現在パレスチナ人が手にすることのできる最良のもの」。

- ・南部、レジスタンスの攻撃、イスラエル兵一人負傷。他方、イスラエル海軍、ラシャディー・エなどを艦砲射撃。